

教師のあり方に関する一考察

－ 学生の声をもとに －

原田 慶子

Consideration of what teachers should be － By students' voices －

Keiko HARADA

要旨：臨地実習において、学生と教師の関係は重要である。今回、教師との関係に対する学生の声をもとに、教師のあり方を考察した。学生達は教師の言動にずれを感じて納得できず、嫌な辛い思いを抱いていることが明らかになった。そこで、教師としては、①学生との間で援助的关系を結ぶ必要がある。それは話しを「聴く」ことでもある。②青年期にある学生に対して、発達課題でもある【自分をわかる】ことの教育を意識して行うことと、学生が《自分についてどの程度わかっているのか》を把握することが重要である。

キーワード：臨地実習、学生の声、聴く、自分をわかる、教師のあり方

Summary : It's important to build a good , sound relationship between students and teachers in the clinical practices. By listening to the students, this study clarified what teachers should be. It was revealed that some students find it hard to understand teachers' behavior , as well as discovering some gaps in-between with rather negative image of the teachers. Therefore , it can be said that it's necessary for us to build a helpful relationship by listening to the students and help the adolescent recognize how much they know about themselves.

Key word : clinical practice, students' voices , listening , self-recognition, what teachers should be

I. はじめに

学生として学んだ2年間の大学院生活は、今までの看護や教育をふりかえる良い機会であった。その中でも、体験的に学んだカウンセリングの理念や方法から、多くのことを気づかされた。

実際、臨床の場へ出てみると、ナースは「①自分の訊きたいことはきいているが、クライアントの話したいことは聴いていない②自分の伝えたいことは話しているが、クライアントのききたいことには応えていない」という現実に出会った。このことは、臨床の場が忙しいためだけでなく、看護の基礎教育のあり方にあるのではないかと、ナースを看護教員にクライアントを学生に置き換えて

考える必要があるのではないかと受けとめた。

つまり、クライアント中心といいながらも、実際はナース中心になっており、看護基礎教育に置き換えると、学生中心といいながら、教師中心になっているということである。なお、学生中心ということは、学生を放任するというのではない。学生を尊重し、学生と教師の人間的な交流の中で授業が深まっていくようなあり方である。

看護基礎教育における学習形態の一つに臨地実習があり、学内での授業（講義）とは異なる人間関係のもとで授業（実習）が行われている。とくに、教師との関係は重要で、その後の学生自身の看護への思いや、実習への態度、卒業後の職業選

看護学科 教授

第11回看護学教育学会学術集会において交流セッションを企画し、一部を発表した。

択に影響してくると述べられている¹⁾。

本研究では臨地実習における学生の声をもとに、修士論文の結果をふまえて、学生の視点に立つということから、教師のあり方について考察することを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象と方法

1) A看護大学の4年生を対象とした自由記述による学生の意見(回収率65.7%)。

今回の学生の意見は、学生が同じ学年の学生に、実習での教員との関係について調査したものである。したがって、教師が学生の調査をする時に起こりやすい、学生への強制力の問題はクリアしており、学生の生の声に近いと考える。

2) 上記の調査内容の確認

上記の調査内容を、他の2校の学生へもみてもらい、調査内容の信頼性は得られている。

3) 直接、学生からの聴き取り調査

調査内容をもとに、協力のえられた5名の学生に話しを聞いた。

2. 対象への倫理的配慮

まず、調査をした学生は同級生へ調査の主旨を説明して協力を依頼し、許可を得て発表していた。筆者は調査をした学生へ、教師の立場で調査の結果を再度検討したい旨を説明し、別の形で発表することを了解してもらい、資料の提供を受けた。そして、調査内容を見てもらった他校の学生および話しを聞いた学生にも了解を得た。

III. 結果

学生の調査と聴き取り調査の内容は、学生が教師との間にずれを感じたり、納得できず嫌な辛い体験になっていることが多かった。そこで、今回は学生が教師との関係で、嫌だったり辛いと感じた内容と、学生が教師に望むことについて述べる。重複するところもあるが、以下ようになった。

1. 教師の態度・表情

教師が無表情で反応したことや教師の視線が気になったり、「教師の質問にわからないと答えると怖い顔をされた」「周りが見てもわかるくらい自分一人だけが無視された」「態度が威圧的で怖い」などがあり、教師の前では緊張し、気軽に話

せる存在ではないと述べていた。

2. 教師の言い方、言葉

学生にとって、教師の口調がきつかったり、技術ができないことに対して冷やかされたりしたことなどが納得できないとあげられていた。そして、学生にとって教師から言われた嫌な言葉は、つぎのような言葉であった。

「何やってんの」「何言ってるの」「何考えてんの」「何でわからないの」「○○したの」「何をしようとしているの」「ハア?」「なんで?」「あ、そう」「それで」「どういうこと」「ちっともわかってない」「こんなのがいいと思っているの」「さあ、どうなんでしょうね」「だから貴方は○○なのよ」「元気だして」「もっと頑張りない」

3. 教師の決めつけ・一方的・強制的

これは、学生が教師の対応に決めつけや一方的、強制的と感じたことである。「自分としては頑張っているけど欠点ばかり指摘された」「自分ではよくわからないが怒られ続けた」「昔の話しをして、今の学生は楽と言われる」「元気にやっているのに、大きな声を出しなさい、元気を出しなさいと言われ続けた」などと述べていた。そして、決めつけや一方的と感じても、そのことを教師へは伝えられない。伝えても反対に言い負かされ、教師の考えを押しつけられるので、伝えるのを諦めてしまうと述べていた。

4. 教師から否定される

「否定的な、欠点を探るような視線が嫌だった」「小馬鹿にされるような言い方をされた」「あなたは根本的に間違っていると言われ、自分の価値を否定されているようでショックだった」「記録を見せたら、あきれた顔でため息をつきながら、何でこういう風にしかないのと言われた」などから、否定されたと感じていた。

5. 学生を理解してくれない

学生の言いたいことがきちんと伝わらないという思いを持ったり、一生懸命記録を書いたのに「こんなじゃわからない」と言われ、やってきたことを認めてもらえなかったことや、学生の話に耳を傾けてくれず、話しの途中でさえぎられてしまうなどから、教師に理解してもらえないと

感じていた。

6. 助言・サポート・指導をしてくれない

「質問しても考えてみてというだけで、助言がなかった」「どんなに調べてもわからないのに、いつまでも調べさせた」「自分のしていることが良いのか不安で聞いても、はっきりした答えをくれなかった」「困っているのに、ヒントも何も教えてくれない」など、必要時にサポートしてもらえなかったと述べていた。

7. 学生が教師に望むこと

- ①学生の気持ちや考えをわかって欲しい
- ②学生の話しを聴いて欲しい
- ③学生のやってきたことを認めて欲しい
- ④学生を否定しないで欲しい
- ⑤恐れ表情ではなく、穏やかに言って欲しい
- ⑥学生としては自分の援助に不安をもっている
ので、よい方向へ導いて欲しい

同級生の調査をした学生は、「看護の対象が個々の特性をもった人間であるように、指導される学生も個々の人間であり、相手を理解することは学生と患者の関係にのみ重要であるのではなく、学生と教員の関係でも重要といえるのではないか。したがって、学生指導の原点は学生個人の人間性の尊重から始まるのではないか」と述べていた。

IV. 考察

学生の調査と聞き取り調査の結果から、学生達が教師の言動に様々な思いをしていることがわかる。そこから教師は何を読み取ればよいのだろうか。「こんな言葉にも学生は反応するのか」と思う面もあるが、あくまでも臨地実習における学生と教師の相互関係での学生の思いである。そこには、教師と学生との関係性の問題（ずれ）が存在しているといえる。教師は学生のことを考えて関わっているのだと思うが、学生にはそうは受けとめられていない。学生は納得できないと感じながらも、教師へはそれを伝えられず、嫌な辛い体験になっていて、学生個人の人間性までもが脅かされているといえる。そして、教師に脅威を感じ指示されるままに行動している学生もいる。私達教師は学生の主体性を育てるといいながら、その芽を摘んでいるのではないだろうか。このような学生－教師関係の臨地実習では、指示されなければ行動できない学生やクライアントと援助的な関係

をもてない学生を生み出していると考える。

安酸²⁾は「経験型実習教育」を提唱しており、この教育を展開していくための教師に求められる能力として、①学生の学習能力への信頼や②学生理解の能力（学生の気持ちを教師が決めつけることなく聴く）などをあげている。これらの能力はカウンセリングの人間観である「人間は自分で方向性を見出す力をもっている」から学ぶことができる。これは方向性を見出す力はその人のなかにしかないともいえ、その力を発揮するには援助的な関係が必要であり、話しを「聴く」ことが重要である。話しを「聴く」トレーニングを受け、話しを「聴く」ことによって学生が自分で方向性を見出すことができるということがわかってくると、「今ここで、学生はどんな気持ちでいるのだろう」と〈教師の思い〉ではなく《学生の思い》へ気持ちを移すことができるようになってくる。これまでは学生が方向性を見出すことへの信頼が足りなかったし、学生の話しをきいているつもりで、実は「聴く」ことにはなっていなかったのだと反省する。教師が〈教師の思い・決めつけ〉で話しをきくのではなく、《学生の思い》にそって話しを「聴く」ことができれば、学生も教師に理解してもらえた、受けとめてもらえたと感じることができる。臨地実習において、教師との信頼関係、援助的な関係の体験がなければ、学生はクライアントと援助的な関係はもてないのではないだろうか。

また、同じようなことを言われても教師の言動に左右されない学生もいれば、自分を否定されたとまで思ってしまう学生もいる。その違いは何なのだろうか。教師の言動に左右されやすい学生の大部分は、教師からみると関わりの難しい学生でもある。それは、[他者へ関心を向けられない] [話しをしていてもなかなか反応が返ってこない] [何を考えているのかよくわからない] [何度関わりをもっても、変化のみられない]などの学生である。

このような学生に関わるキーワードは、学生が【自分をわかる】ことだと考える。一般に、関わりの難しい学生というと、『どういう関わり方がよいのか』という視点で考えがちである。しかし、《学生はどんな状態にあるのか（自分についてどの程度わかっているのか）》を教師が把握できると、学生個々を尊重した関わりができると思う。その理由は『学生が自分についてわかっていくプ

ロセス』の研究から以下のことがいえるからである。

学生が自分についてわかっていかなければ、

- ①他者へ関心を向けることは難しい。
- ②自分と他者がちがうということもハッキリしていない。
- ③自分の感じていることや自分の考えがハッキリしないので、他者からの問いかけに対して反応を返すことができない。

中村³⁾も、「私であることがはっきりしない場合は、自分が話している内容がこれでよいのか不安を持ったり、自分の考え方・気持ちに対して自分の中で明確にできず、その評価基準を他者に求め（つまり、他者からの評価を気にする）、その結果、内的に安定しない。そうすると、相手の気持ちにベクトルを向ける余裕がなくなり、相手に対する共感性が低くなる」と述べている。つまり、自分についてわかってくることが、相手に向かう姿勢をつくるということだといえる。

そして、「話しをしていてもなかなか反応が返ってこないで、何を考えているのかよくわからない学生」についても、③の「自分の感じていることや自分の考えがハッキリしないので、他者からの問いかけに対して反応を返すことができない」状態に学生がいると理解できれば、教師もイライラしないで楽に学生と関われるのではないだろうか。このような学生は、教師から質問されることに恐怖心をもっているので、教師の話した内容をきく余裕はなく理解できていないことが多い。その結果、教師にしてみると、「何度関わりをもっても、変化のみられない学生」ということになってくる。

反対に学生が自分について少しずつわかっていくと、

- ①自分の感じる・気づく力が高まる。
- ②自分の課題に自ら気づき、方向性を見出せるようになる。

つまり、教師が「何度関わりをもっても、変化のみられない学生」は、自分がよくわからないために、自らの方向性を見出せないでいると考えられる。

安酸⁴⁾は、「経験型実習教育」における学生に求められる能力として、①自分の経験・感じたことを大切にできる力②自分の経験をふり返り気づく力③人の意見を受け止め自分で考える力などをあげている。これらの能力も、学生が【自分をわ

かる】ことが前提になるといえる。

したがって、学生に関わる時の重要な視点は、《学生は自分についてどの程度わかっているのか》である。これまでの看護基礎教育では、学生が自分について考える機会を充分提供しないで、他者を理解することを求めてきた。今後は他者との関係をふまえて、自分を考える教育が必要だと考える。

V. 結論

臨地実習における教師のあり方としては、

1. 援助的関係の真の意味を体験的に教育していくこと。そのためには、教師自身が学生との間で援助的関係を結ぶ必要がある。それは話しを「聴く」ことでもある。
2. 青年期にある学生に対して、発達課題でもある【自分をわかる】ことの教育を意識して行うことと、《学生は自分についてどの程度わかっているのか》を把握することが重要である。

VI. おわりに

今回、学生の生の声をきくことができ、教師のあり方を考えられた。今後の臨地実習へ生かして学生と関わっていきたい。

貴重な声をきかせて下さった学生の皆様に心より感謝致します。

引用文献

- 1) 杉森みど里：看護教育学（第3版），p 258，医学書院，1999.
- 2) 安酸史子：経験型実習教育の考え方，Quality Nursing, 5 (8), p 6, 1999.
- 3) 中村和彦：人間関係における「ともにある」ことに関する一考察—「ともにある」ことの前提条件としての「わたしである」ことをめぐって—，人間関係，第17号，p 4，2000.
- 4) 安酸史子：経験型実習教育の考え方，Quality Nursing, 5 (8), p 7, 1999.